



Title	〈図書紹介〉バウハウス叢書5『新しい造形(新造形主義)』ピート・モンドリアン著宮島久雄訳 中央公論出版, 1991年2月/バウハウス叢書7『バウハウス工房の新製品』ヴァルター・グロピウス著宮島久雄訳 中央公論美術出版, 1991年7月
Author(s)	藪, 亨
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 149-151
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53093
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

バウハウス叢書 5 ピート・モンドリアン著 宮島久雄訳
『新しい造形 (新造形主義)』 中央公論出版, 1991年 2 月
バウハウス叢書 7 ヴァルター・グロピウス著 宮島久雄訳
『バウハウス工房の新製品』 中央公論美術出版, 1991年 7 月

バウハウス叢書が、約半世紀の時を越えてようやく邦訳され刊行され始めた。待望久しいその邦訳シリーズの出現である。バウハウス運動はわが国においても早くから注目され、その理念や持続的な現実性が広く熱心に不断に議論されてきており、そうしたわが国におけるバウハウス受容の歴史を考えると、今日までその完全な邦訳が公刊されていなかったのは不思議にも思われる。

当バウハウス叢書は、ヴァルター・グロピウスとラースロ・モホリ＝ナギの共同編集によって1920年代後半にミュンヘンのアルベルト・ランゲン出版社から刊行された。そして最初のシリーズとしてまず8冊が1925年に現れている。その当時の趣意書は、当企画の直接の動因や主要な課題そして協力者の人選について次のように述べている。「バウハウス叢書の編集は、すべての生活造形領域は互いに緊密に結び付けられているとの認識から行われる。本叢書は、芸術や科学や技術の問題を論じ、そしてさまざまな造形領域の問題提起や活動方法や活動成果についての情報を専門活動に束縛されている現代人に提供し、そうすることによって自身の知識と他の活動領域における進歩とを比較するその基準をもたらそうと企てる。この広がりから課せられた任務を遂行しうるために、編集者たちは最も適切

な諸国の専門家たちの協力を得ており、彼らは現代の生活現象全体への専門活動の組み入れに努めている専門家たちである」と。ともすれば独善に陥りやすい専門諸活動について、その生産的な相互関係をより全体的な生活の場において調整していこうとの当叢書の基本課題は、専門化がいよいよ高度に発達した今日においてはなおさらに切実な問題のひとつであるといえよう。

バウハウスが初期のいわゆる「表現主義的な時期 (1919-1922年)」の神秘的な宗教感情に基づく超越的な綜合観を脱して、新しい綜合の方向を模索していた丁度その頃に企画されたのが当バウハウス叢書であった。グロピウスとモホリ＝ナギの先導のもとに、近代的な生活のすべてを包含する新しい綜合の理念の基礎がためを目指して、芸術、科学そして技術の諸問題を広く取り上げようとしたのである。しかしその編集者たちがやがてバウハウスを去ったこともあって、実際に刊行されたのは造形芸術をめぐる総計14冊にとどまり、建築、美術、デザイン、映像芸術そして舞台芸術の新しい理論とその成果が多面的に収録されている。したがって当叢書には、バウハウスのいわゆる「フォルマリスムの時期 (1922-1925年)」から、いわゆる「機能主義的な時期 (1925-1927年)」にかけての基本的な造形理念や多様な活動の所産が

網羅されており、これらはバウハウスのこの時期の貴重な史料集成ともなっている。

さて、ここに紹介するのは、その中の2冊の邦訳書である。まずその第一は、バウハウス叢書第5巻『新しい造形（新造形主義）』であり、抽象芸術のすぐれた先駆者の一人であるピート・モンドリアンの造形思想に照明が当てられ、モンドリアンが1920年代初頭に発表した次のような理論的著作が集録されている。1、新しい造形（新造形主義）。等価的造形の一般原理。2、音楽における新造形主義とイタリアの未来派騒音主義者。3、新造形主義、音楽と未来の劇場におけるその実現。4、遠い未来における、また、今日の建築における新造形主義の実現。5、絵画は建築より価値が低くなければならないか。以上の5編である。

「未来の人間」に捧げられた同書においてモンドリアンは、純化された造形手段による美的な関係の表現を目指す「新造形主義」をきわめて論理的に説き明かすとともに、よき未来に向けての芸術家の建設的な使命を盛んに鼓吹する。彼の考えによれば、芸術は「自然的なもの」から「抽象的なもの」へと発展しており、「新造形主義」に至っては自然的ものがつねに造形として内面化されて、ついに「自然と精神との均衡」が現出する。また、すべての造形は同一の根源を有しており、絵画における「新造形主義」の理論は建築や舞台芸術、音楽や言語芸術などの他の芸術領域にもその展開が可能である。そればかりか「新造形主義」の実現は芸術の分野にとどまることはない。これに基づく等価値性の造形は完全な人間をも準備できるし、芸術は近代的な

生活の中で実現され環境の一部となり、ひいては「芸術の終焉」を招来するであろうとも予告する。

このように同書には、まさにモンドリアンの前衛的な造形思想の真髄とその遠大なヴィジョンが集約されている。再び文化の転換期に直面している今日のわれわれにとっては、彼の疑いを知らない進歩への確信や、普遍的な美を近代的な生活世界において実現することへの彼の熱中は、余りにも楽観的で一面的な先への見通しであったとも思われよう。しかしその当時においては、モンドリアンの前衛的な造形思想とこれに根差した進歩的な美的ユートピアへの指向は、バウハウスが初期の復古的な総合芸術への追求を翻して、「芸術と技術の新しい統一」という近代的な目標に邁進する際に、すぐれた指針のひとつとなったのである。

さて、こうしたバウハウスの最初の転換期における生産活動の動向とその多彩な所産を収録しているのが、バウハウス叢書第7巻『バウハウス工房の新製品』である。この製品写真集の巻頭には、『バウハウス生産の原則』と題したグロピウスの宣言風のまえがきが掲げられており、「ものはその目的を実現すべきである、つまり、その諸機能を満足させ、丈夫で、安価で、そして美しくあるべきだ」との、いわゆる機能主義的な考えが明示されている。そしてさらに「バウハウスの工房は本質的には実験室であり、そこにおいて現代にとって標準型的で、量産可能な器具が綿密に型にまで展開され、継続的に改良される」とその社会的な役割が再定義される。かつて戦前にドイツ工作連盟がその口火をきったデザイ

ンの課題、すなわち産業による大量生産へのデザインからの取り組みが再開され、バウハウスはいよいよ外部の産業活動との結び付きを積極的に推進し始めるのである。

本書には、この新しい生産原則の方向で創案された近代的な住宅向けの家具調度の見本が、4枚のカラー図版を含む総計百枚を越す写真図版で示されている。これらは1920年から1924年までの家具工房（形態マイスター：W. グロピウス、技術マイスター：R. ヴァイデンガー、1924年度工房指導：M. プロイヤー）、金属工房（形態マイスター：L. モホリ＝ナギ、技術マイスター：Chr. デル）、織物工房（形態マイスター：G. ムッヘ、技術マイスター：H. ベルナー）そして陶器工房（形態マイスター：G. マルクス、技術マイスター：M. クレハン、1924年度原型工房の指導：O. リンディッヒ、Th. ボーグラール）といった4工房の活動の成果であり、その公式作品集ともなっている。折しも当時バウハウスにおいて芽生えていく独特のデザイン、すなわち器具の形態を単純な幾何学的基本形態に還元し、それを本質的な機能に関係づけて発展させていくというデザインについて、その生成の実相や妥当性を再吟味していく上で本書はこのうえもない資料集である。

また、両訳書には、新バウハウス叢書の編集者 H. M. ヴィングラーのあとがきと註釈（第7巻にはハインツ・シュピールマンの新版註釈が加わる）、そしてさらには翻訳者の宮島久雄氏のあとがきとして『モンドリアンの画風の確立と芸術論の展開』と『初期バウハウス生産工房の活動』がそれぞれ収録されている。そしてこれらの諸

論評や諸論文は、バウハウス研究へのすぐれた最新の手引きともなっている。

（飯 亨 大阪芸術大学）